俳諧十家類題集

春

中村俊定文庫
文庫 18
711
1

滄浪にひつきを出て其流派の宗匠
となる事四川に朱八津と香楽源に
風流の末広く今や湯云
するものゝ江戸に多く人多く其乃四
海より溢れるなる海しりてや十万
乃風詞を集むるに此の月かける
有将其題 ことさら 菴主属之題

早稲田大學圖書

意の烏焉馬にはあれと見易せし一の
たゞ大せうかし殺に畢りてさく
醒のいと見えされの法に幽玄の
感慨志深き趣のこと洒落に
のみさぬかして好ましきところに限ら新
古より何ぞ渾温古きを今も
かにこ新らしき基色の便となさしめ

吾が世に篇什多あれど唯に
憤焉として自放まゝに紀す者
肆か苑枝八川好み汁の韓の
中より擬出てまさに縦横る泡
要の玄誠をい集めて五言韶
乃冊子作る天か禅まゝにの需
免に乏しに此道の流くもかな

只もの歴々ます蛞蝓の這ひ
のほるたの踏よりて毫を潤る

寛政十一年
未仲春

浪華
八千坊
瀏徳

序ノ二

但去来支考杉風之雑五冊
芭蕉 其角 嵐雪 沾徳 来山
蕪村 言水 闌更 蓼太 麦水

俳諧十家類題集春之部

○目録

正月 睦月 初空 年明 今朝春 明の春
初春 千く春 御代春 花春一 春立 宿の春
元日 初日 歳旦 三朝 年立 新年二
日の春 年新 二日 歯朶 歯固 削掛
恵方棚 门松 標 松錺 錺竹 錺縄
四方拝 若水 雑煮三 蓬莱 喰積 穂俵
野老 小殿原 年男 庭竈 年玉 羽子
破魔弓 試筆四 筆始 初夢 着衣始 寶引

寳船　ゑ經　子の日　初寅　薺　さゝらこ
菜摘歌　七種 五　若菜　帳綴　十一日　踏分
廿日正月　懸召 六　清忌宿　東風　春風　春雪
雪消　雪間　福寿艸　蕗の薹 七　至ゑ　春草　若草
春の山　春野　杉菜　梅 八　臥龍梅　紅梅
柳 十二　青柳　霞 十四　鶯 十五　春鶯囀　百千鳥
春夜　春夕　やゝ春　春の宿　宵の春　白魚 十七
海苔　春の海　春の水　藪入 十八　二月　衣更着
傳奏下り　初午　薪能　二月堂 十九　吉野餘配　涅槃
彼岸　水間　春寫　撫月 二十　春月　出代り
雛子 廿一　燕 廿二　春雁　行雁　帰雁 廿三　雲雀

目ノ一

雀子　親雀　蝶 廿四　蛙 廿五　雨蛙　蟇
猫恋　陽炎 廿六　田螺　蜆　蛤取　馬刀
飯蛸　初櫻 卅一　糸櫻　椿　櫻植　櫻木
焼野　を[illegible]　畑打 卅二　耕　種下し　種俵
種よし　苗代　芹　芹花 卅三　土筆　菜の花
烏賊　[illegible]　芽ぐみ　山葵　狗脊　蕨 卅四
凧　春雨 卅五　三月　上巳　桃節 卅六　雛 卅七
草餅　鬪鷄　曲水　汐干 卅八　貝拾　青精飯
巻鎮　寒食　御身拭　桃 卅九　海棠　梨花
花 四十　櫻　櫻人　花衣　落花 四九　阿蘭陀
櫻鯛　青ざし　和布　傀儡師　青麦　[illegible]し 五十

山吹　菫　菊苗圭　茶摘　蓬　日
炉塞　[illegible]　柳鮠　小鮎　蚕　[illegible]
別霜　行春圭　春の暮　暮春　春限　春惜
春を送　晩春　春盡五圭

俳諧十家類題集春之部

八千坊　輯校

○正月

睦月
[illegible]　言水

初空
[illegible]　嵐雪
[illegible]　言水

年の明
[illegible]　沾徳

今朝春
[illegible]　嵐雪
[illegible]　来山

中村俊定文庫

明の春

日のひかり今朝や鰯のかしらより　蕪村

かすみや葉蝶も鳥をならすなる　其角

四海波魚のきく耳なかりけり　嵐雪

初春

庵の春を申す信ふり都人　沾徳

僧朝や草履の月をさす空の春　其角

天の戸を蹄て明くる初鶏　希因

千々春

鶴亀もなき新湖生て千々のなる　其角

御代春

国をさへ一万枝を御代の春　、

花春

誰人か菰きていませる花の春　芭蕉

徒中との姿を取りそれの春　、

春之

宿の春

元日

風くの垣をもうらやし宗の春　嵐雪

五十とて四谷をえらみ家の春　、

春たつや氷柱の雫の軒より　希因

宿の春何もなきこそ何もあれ　素堂

元日の富や富木の見えるより　沾徳

元日や舞の者乃御代守　言水

元日は田毎の日こそ恋しけれ　芭蕉

元日の居ごゝろ十の指見し　其角

元日や月見ぬ人の指の音　、

明る夜のみのゝ娘しめりかな　、

元日も旅人さえぬ大路かな　治徳
元日や雑煮むつかし嫁こ喰　来山
元日や淋しうもいふのありあり　嵐雪
元日や晴て雀のものかたり　、
元日やされば野川の水の音　来山
初日　天の戸を戴きはらして初日影　麦林
歳旦　年々や猿に着せたる猿の面　芭蕉
三朝　こちの松之夕暮さえも春の色　嵐雪
年立　年たつや家中の礼は星月夜　其角
新年　似合しや新年ふるき米五升　芭蕉

日の春　日の春をさすがに鶴の歩みかな　其角
年新　掛蓬萊見て年の新なり　来山
二日　二日にもぬかりはせじな花の春　芭蕉
此句は睦月二日より ひらきはじめしよし 来て談せし也
怜歳と組しる葉守る二日かな　嵐雪
歯朶　歯朶の葉の七符は注せ小豆粥　言水
歯固　歯固や年よるこさしてものの香　、
削掛　けつりかけ青葉わかりの皇流れ　其角
恵方棚　西新や曆たゝむさ恵方棚　言水
糸穴の四割をきさらぎきの方　其角
門松　二見つゝしき酒積や続く門の松　麦林

揲
松餝
餝竹
餝縄
四方拝
若水
雑煮

曲りなきの世に伸しやまくら　嵐雪
幾霜に心ばせをの松かざり　芭蕉
松かざり伊勢が家買ふ人は誰　其角
竹合の松もうるさて飾り竹　、
うぐひすに鶯のまじり見やかざり縄　麦林
こともめや朝山まて四方拝　言水
若水に鶴の拙も汲涼しさよ　其角
若水に智恵の鏡を磨かむや　嵐雪
若水や老を忘れて筒井筒　麦林
人も来る雑煮より雑煮のはら　言水

蓬莱
喰積

升こゝ待つんと新年に分入時　来山
三椀の雑煮かゆるや長者ぶり　蕪村
蓬莱に聞かばや伊勢の初便　芭蕉
家にたる蓬莱作り見えつゝり　沾徳
蓬莱に春の夜見せて遊　言水
蓬莱の松にこそとや若根松　其角
蓬莱や升の中から山が出る　来山
蓬莱の谷から苔の記るとき　、
蓬莱の山まつりせん老の春　蕪村
ほつ〳〵と喰摘やらぬ夫婦哉　嵐雪

穂俵　ほだはらや濱松の枝の手向けり　沾徳
野老　ところうり太宗の里ひとり　其角
歳旦 千余歳之化児　海老の腰を試ぬ魚くし小歳旦　言水
年男　白魚のちりも撰けり年男　、
庭竈　庭竈牛も雑煮を居へけり　其角
年玉　少しつゝ梅折る小野の翁かれ　言水
羽子 文字せよ　妻ならん我手にあしく松の羽子　、
破魔弓　きそはしや當時紅裏四天王　其角
二月会 小督の局の詠　詠るや破魔弓ねらふ亡者　来山
試筆　母とうて宗耕をさせし田のくらん　沾徳

華始　大津絵の筆のはじめは何仏　芭蕉
初夏　初夏や絵し何頃ならり　其角
着衣始　元服の羽織やしきせ若はる　言水
寶引　寶引に蝸牛の角をさくらし　其角
寶船　夏吹く浪のうつゝ也清瀬寺　嵐雪
須磨吹ぬ寝くろや寶来　、
水祝　さすかにも女房となりせんか祝　其角
生死のむかし男になる祝ひ　、
子の日　よ倚う宮とえく子や和子の眼玉来　嵐雪
初寅　毘沙門を青よ尾上の春おろし　其角

薺

ゆくしつるも新よ匂ふる薺かな　其角

百人の雪隠きゝし薺うち　、

ぬき捨や薺は隠る土あらし　嵐雪

風俗てなよとつれる薺の腕　、

薺うつ住ひ秘なり菜の秋　麦林

営も賤し飼あり芹なづな　、

畑根の鏡をさらしまて薺打　、

なひくと

そゝひらる西の夷までひゞきけり　其角

なほ詠歌

とらちも女は（丈）妻なかりしなかりかな　嵐雪

七種

七種に枯葉まし　めぐるその瓦哉　治徳

若菜

万葉七つもと刻まる

春の草や住よしこゝろして若菜　其角

ひろふ日の七種寺は誰ならん　、

七種や屋一葉を新り入　希因

なつかしき人の行き袁菜　嵐雪

七種や猿の顔のさむきひ　蕪村

しんまでふる雪の若菜哉　芭蕉

杖の若菜も来る新若菜　其角

傘持て何くまひまして若菜　、

うらま花菜よ里の新若菜　、

鳥の帰り飛る摘て　、

きの人までおもてろし花嫁よめ若菜　希因

おもしろく雪に隠るて来ぬる若菜　来山

ましく〳〵わくる若菜に雪け京　、

硯下紐の翫餝人くるゝ清　麦林

帳祝

雪の戸や若菜ばかりの道ひとつ　言水

恵方須磨こえたる帳の三枚目　其角

十一日

踏歌

おけ拍子還城楽のなりにける　、

帯せぬそ千代ふるゆかし踏歌の宴　、

廿日正月

正月も廿日になりて雑煮かな　嵐雪

懸召

ゑらゑらと若菜ぬ衣そでにうれし　言水

御忌詣

清水のうへ四割の晩ざくら　言水

清水まうで転る珠数節　、

人の世中のにぎはへる日の寺林　其角

清水のうちかけや谷の御堂て　蕪村

難波女や京を寒がる御忌詣　、

東風

河内路や東風吹送る巫女が袖　、

のぼりくる東風吹いせの出店哉　、

春風

春風や堤ごしなる牛の声　来山

住よしにて

春風に吹しなる松の中　、

堤はずの清水の旅やまちの風　蕪村

春雪　曙のむらさきの幕や春の雪　蕪村

片町にさらさ染るや春の風　、

雪消　汐越まであをぬれて行春の雪　来山

北国のならふとけるたる消る雪かな　沾徳

雪間　杉むらて鳥をあはするゆきまかな　其角

福寿草　福寿草一寸ゆきのなかなり　言水

隠れ家や麦のこぼれに福寿草　麦林

蕗の薹　弱とみてふまるる傍に蕗の薹　其角

梅の香や出かけしを蕗のとう　、

草の香や柳をみれば蕗のとう　、

蕗の芽のほうけて人の深山かな　嵐雪

苔とともに根ごしにかけ蕗の薹　蕪村

茎立　蕗たちてくさらぬ草のはかまかな　嵐雪

春草　木の名のならひ草やものぬく草枡　芭蕉

むしつては捨るのくれ草　来山

もふ草の枝をかけて洗濯ほし　、

若草　若草や松風の道なりけり　芭蕉

春野山　見えてくる九日の野山かな　、

春の野や木風に遠の袋合せ　沾徳

春興　さるの町やなさかなしの旅まで　来山

も 四十　桜 四十六　初桜 卅一

清し 四十　小錦 四十一

杉菜

路くハ木ゐてもちる杉菜哉　沾徳

梅

山里ハ万歳遅し梅の花　芭蕉

ゆるもとく藪の中なる梅の花

きる鳥ち菜ハ梅りかゆるまり

ころとるよ藪の中なる梅の花

梅咲てましこ人の庵りうる

梅か香に乃つと日の出る山路哉

まろるきとうろみさ庵なる所梅哉

ぬなる梅よもろ川風もうれ

箒のゆしゆてのなうる梅の花

其角

樹を植るよ文宝の吹て

小袖着せて使ハ見えむめ乃妻

宿のむめ振ハあとりまろうし

作き枝の手さきうぬ中徐る梅

むめのそうよ見ハをゆちて庵まいう

窓さと女もかし妻かくろひぬ木末草

梅の名をうろて中路の中きれ

草木のゐくいろ見よ女ものむめ

なつりしき枝のさけめやし梅の花

三日月の庵あ女ゐし闇の梅

こ川とりと風の中をて藪ハ藪の梅

猿堀のこゝろならねは梅の字

百八のかねてまよひや闇乃梅　其角

梅さむく愛宕の星の匂ひかな

氷肌玉滑とや

岸ちりし花もまつ梅の皮

せかれてそのふくろふ掃ふむめの字

あせをも銭目あても梅乃匂ひか

きのふに家をとひてやむめれる

梅か香や乞食の家ものそかるゝ

洗濯小袖を掛て梅へる

梅一輪一りんほとのあたゝかさ　嵐雪

輪に組て梅をぬきたる月夜哉

梅咲や歯のないふくにあしらひし

梅干しや見る川く居る梅の字

この梅を遠くに月の匂ひかれ

梅にさむる紀貴なる幸の

よの中の背中を梅の表かな

梅か香やたちまちて咲や松の風　希因

白気ふう咲や絆代の細なし

日妻も何とて又匂ひる　来山

梅の花名もなく匂ひて匂ひ哉

むめ白し年々へたての小醒井　芭蕉
一輪はおるゝ身て梅の座敷かな　来山
三味線も小歌もよけれ梅の花　、
其のかしやし藪とはいはれ妻の花　、
鶯や早や梅かゝる中にはなれ　、
小坊主に振ふらせて梅の花　、
梅讃ふていかしの月や有明の　、
梅のさかりや見る人まつてたはれの　希因
むめ咲かぬ宿も雪ある谷の水　、
まてとかゝる梅かきひをいれられ　来山

北意乃室
盛りけり顔て鶯むめのおれ　、
行くも来る杖の梅の枝の花　沾徳
梅の香は何をさ恋の折まくら　、
折て後いふ事なくて垣の妻　、
留守の後乃梅ある人に心移と　、
見送るを宿の中の梅乃あるしかな　、
梅折まで鼻をさし出す身かな　、
此屋に折れぬ梅の柳鶯かな　言水
清々しさも梅の香見れ　、
梅の香をよせて孫子の住居かな　麦林

梅の香や隣の娘て加減よし　　麦林
見ところはあまてかしこし梅の花
梅ふく咲きりハいつれ侍ひとり
十八町奥の里行りむめの花
蓑むしの古巣に添ふて梅二輪　　蕪村
さく梅や小野の菜やにほひより
しら梅の枯木に戻る月夜哉
白梅や誰むかしより垣の外
梅咲て揮川流る里の外
しらむめや墨芳しき鴻臚館

二もとの梅に遅速を愛すかな
梅遠近南すべく北すべく
宿の梅折とるほとになりにけり
出替りとしてきれなりぬ梅の宿
むめちるや螺鈿こぼるゝ卓の上
舞々の場をふさげり梅の宿
小豆売小家の梅のつぼみがち
梅咲ぬどれがむめやらうめぢややら
旅を去て人なき門や梅の宿
源八をわたりて梅のあるじ哉

臥龍梅

紅梅

柳

二もと咲し常盤の宿の柱女なる　蕪村
うめ折て皺手にかこつ薫かな　〃
ふ雲の影を浮むや暮の花　嵐雪
紅梅や比丘より劣る比丘尼寺　蕪村
紅梅の落花燃らむ馬の糞　〃
紅梅やかの銀閣寺やぶれ垣　沾徳
往橋にさはる柳のしなひかな　芭蕉
八九間空て雨ふる柳かな　〃
鶯を魂に眠るかたを柳　〃
青柳や皺を柳のきに汚す　沾徳

大井川たもとにかゝる柳かな　〃
垣結てなびかれぬる柳かな　〃
ゆるゝかに吹く袖や玉柳　〃
欄干や柳の曲を流るゝ獺　其角
柳まで皺よるゝものを春もなし　〃
風なしに吹まはる柳かな　〃
曲れるを曲てまがらぬ柳かな　〃
貴をしもつゝみて移る枝折　〃
枝垂の咲なき比柳かな　〃
淋しや中なるゝて柳かな　希因

鴫生立かくれかねたる柳かな　其角
行さまに小鷺の顔も柳かな　、
同じ枝につく鶯や柳かげ　嵐雪
池に鶴あり後先ちらす柳陰　素堂
胴をかくし牛の尾戯る柳かな　、
蜘の糸にかゝる日も行柳かな　希因
静さに庭を歌よむ柳かな　、
風縁も後へなびける柳かな　麦林
きつゝ来て入る日を柳かな　、
花さへぬ身をふくめる柳かな　、

青柳

いそつしおゆくに菅をふみて柳かな　、
ふる寺に杭をさしたる柳かな　蕪村
梅ちりてさびしくなりし柳かな　、
出る杭をうたうとしたりや柳かな　、
梅折て杭さしあまる雨のひま　、
川音の柳に似たる嵐かな　来山
雨の柳糸ある琵琶の緒を掃　、
青柳やまだ咲ぬ本よりさかえけれ　希因
青柳や芹生の里のせりの中　蕪村
青柳や我大君の草か木か　、

霞

はるなれや名もなき山の朝かすミ　芭蕉
松ひとつ霞を出ぬ野ろゝ郷　沾徳
海ちかし鋒ろ引つる霞かな　、
花を出て松へしミゆくゝかな　嵐雪
恒しこ山錦うくる霞の那し　希因
破生錦も霞む数ひゝ嶋の海　言水
白枝よりて数の艇を射かゝ　、
鞍かけ霞ミけりや出ず駒八百里　、
霞ミけり白枝をとか江の山なれ　、
指南車を胡地に引去る霞かな　蕪村

鶯

鶯や柳のうしろ藪のまへ　芭蕉
鶯も笠きて出よわかなの中文　、
掃除して来ぬ日は庭に鶯の　、
うくひすや板目綱張柴の窓　沾徳
鶯や弦呼とつ原紫の門　、
うくひすや隣木によ出る藪の内　、
鶯や言待るゝうしろ礼返し　其角
竹とりて鶯まつ竹虎落　、
清月よみ丁哭くまる花の香　、
うくひすの啖ゑしきりしん　、

うくひすや嵐ちりゆく闇のひま　其角
鶯よ菜数んしるのあや、
鶯よちかころふなきしらね、
うくひすよいてあえさん杖銭、
鶯のうたを聞てよそへひつるよ、
鶯よ飛出ることひさしうえふ、
うくひすや出佛の宿あふるる声　嵐雪
鶯よほうしく鳥さる山経つ死、
鶯をなすつくるるさし村さるめ、
うくひすの宿ともるくれ小拐鉢、

鶯の啼きこしるや佛の奥　希因
うくひすや茶釜の井も飲り山、
鶯や雪れも茶の下よ消、
ひと日く梅よ鶯うれしやる、
覚束なけも鶯ふて字活く言、　来山
うくひすや去年の梢よ出入、
ふのつとする鶯字つ飛さ門、
ぬしやまり鶯の帰麦跡、
鶯や人よ待せて飛てけり　麦林
鶯よ夜啼の声くりちりよ、

うくひすの鳴そゝくや和哥の浦　麦林

鶯の囀らしきり月日かなし、

鶯の啼く日も世をも忘れけりぬ、

鶯の調つも深し竹乃奥、

うくひすの啼やちいさき口明て　蕪村

うくひすの麁相かましき初音哉、

鶯の日枝をうしろに高音哉、

うくひすや家内揃うて飯時分、

うくひすや茨くゞりて高う飛、

うくひすのあちこちとするや小家かち、

鶯の聲遠き日も暮にけり、

鶯を雀歟と見しそれも春、

春鶯囀　伶人の門をうつや鶯の声　其角

百千鳥　（浅草川 後舟）河上を柳かむ欠ヶ百千鳥、

春夜　春の夜は桜に明けてしまひけり　芭蕉

（春夜於燈下）春の夜や宵曙の其中に　其角

春の夜や盥を捨る町はづれ　蕪村

春夕　閣帳の綿さしくらき春の夕、

春の夕たえなむとする香をつぐ、

やゝ春　春もやゝけしきとゝのふ月と梅　芭蕉

春の宿

宵の春

白魚

折釘に烏帽子かけたり春の宿　蕪村

筋違にふとん敷たり宵の春　、

肘白き僧のかり寝や宵の春　、

公達に狐化けたり宵の春　、

ふみ書る梅にもたらし白帋かな　其角

白魚や黒き目を明く法の網　芭蕉

菜摘むもし白魚を吾妻川に放ちけり　其角

白魚の色のあはれを川に知れ　、

白魚や海苔を下造の置合せ　、

白魚や漁篝りを吹かひあら　、

海苔

春の海

春の水

白魚の罾くるふひちらうかな　、

白魚哉やさらつゝなへる苔　来山

衰ひや歯に喰あてし海苔の砂　芭蕉

行水や何にとゞまる海苔の味　其角

春の海終日のたりのたりかな　蕪村

ちくま川春行水や鮫の髄　其角

春の水かろく鐘ての浮きぶくれ　、

菜摘も春日に飛むかへの付も　沾徳

梅ちうし魚の兒える春の水　、

足よわのわたりて濁るはるの水　蕪村

春水や四条五條の橋の下　　蕪村

橋なくて日暮んとする春の水

春の水背戸に田作らんとぞ思ふ

ちるれ春やうらたく杭縄の驚く哉

地を這ふ鶴のあゆみや春の水

草霞み水に声なき日ぐれ哉

養父入

やぶ入の中やわすれていなかの空　　其角

やぶ入や牛合點して大原まで

藪入りやつゝみなからも袖の雪

藪入りや鳥が音いでゝ日くれんとす

やぶ入や守袋をわすれ草　　蕪村

藪入や鉄漿もらひ来る傘の下

やぶ入は中山寺の男かな

やぶ入の夢や小豆の煮えるうち

藪入りや余所目ながらの愛宕山

○二月

衣更着

きさらぎや火燵のふちを枕もと　　嵐雪

傳奏下り

傳奏の雲井はなれて都入　　沾徳

初牛

はつ午やけふりの乳母ち夕日影　沾徳

初午や妻の新ふむ京隠人、

いのりよりおもひそめてやつまう山　其角

古京の初午

初午や賽銭よくくを芝居うら、

初午やその家くの袖たゝみ　蕪村

はつ午や狐羽四塚の窮のこゑ、

はつ午や梅持よりよ日のあさる、

薪能

地風のきえよさりなる薪かな　沾徳

傘や薪の灰乃けむさ残し　其角

二月堂

水とりや氷の僧の沓の音　芭蕉

かし井戸の湯法待ふん焉　蛙　言水

灯ふを火けふゝ近し二月堂、

吉野鐘能

鐘那り國栖人こまめ参りたり　其角

涅槃

嵐吹る涅槃の猫となりにけり　言水

不生不滅のこゝろを

董まをおてさとりにけり涅槃不滅、

絹ミ子の大を泣けるれ涅槃像　希因

猫も人分や相人て生る葉のこゝろ、

老僧の紀嫁ひあり涅槃像　麦林

所よも拝まぬけや涅槃像、

牛の角前めもけられ涅槃像、

彼岸

涼し余寒も暖も彼岸迄　其角

精進をおかしいうもし我の彼岸哉　来山

命婦より牡丹餅たばす彼岸哉　蕪村

水間

ゑまうる入清馬かゝる水間寺　其角

春雪

きのふ二日むかしけるか春の雪　来山

朧月

朧月日戸さしつゝ妻の息　言水

猫の妻梅うらさびり朧月　、

象よ行ちぬ月残やし朧月　其角

あふみきそ松の露さに月あるゝ　、

中川やまたゝいんで朧月　嵐雪

切月や朧を雪にまぎれけれ　来山

鳥やこの日くれにゆく朧月　、

ときくるよ玉のくろさやおぼろ月　、

湖のうつる一書翁や枕おぼろ月　、

満汐の戸のまゝやおぼろ月　蕪村

ちらちら入川もさかにおぼろ月　希因

象も琵琶ひくうたも朧月　麦林

よき人を宿す小家や朧月　蕪村

薬盗む女やは有おぼろ月　、

女倶して内裏拝まん朧月　、

春月

さしぬきを足でぬぐ夜や朧月　蕪村

楽遊をそむく枕ありけり春の月　沾徳

春月や印金堂の木の間より　蕪村

出代り

東潮

出代りや左門の後家の扉　嵐雪

出代りや幼ごころに物あはれ　、

出代りや人に世話して逆旅から　甚角

出代りの宮や所親のかゝえ　麦林

出代りや春さめざめと古葛籠　蕪村

雉子

蛇くふときけばおそろし雉子の声　芭蕉

父母のしきりに恋し雉子の声　、

雉子も常は足らぬ廣野哉　沾徳

尾をひきずりて草の雉子の声　言水

笑しや麦踏しての雉子　、

雲井中を行ゆかし雉の声　甚角

うつくしき親子の距哉　、

人に遭ひし雉をとむる夫の声　、

角田川にて

そなたもその子を尋ねて雉の声　、

草深き中に恋しき雉子の声　希因

きじ啼や草の武蔵の八平氏　蕪村

一ト塩の声きて行く蘭の雉　嵐雪

雉

雉子啼や坂を下りの驛舎　蕪村
木瓜の陰に顔たぐひ住むきぎす哉　、
むくむくと起て雉子追ふ犬や宝寺　、
畑山へ通ふ大工やきじの聲　、
柴刈に砦を出るや雉子の聲　、
日くるゝに雉子うつ春の山邊かな　、
兀山や何にかくれて雉子の聲　、
きんきんと雉子のなく啼て渡る　麦林
業平屋根の鳥にぬ日て啼き　葱　言水
茶の木に雉子落しけり　里葱　甚角

降かゝるふさに隠るゝ雉子かな　、
海面の虹をけしたる雉子哉　、
傘にぬれつゝきぬ雉子の聲　、
山寺に乞食いへとも雉子の聲　、
川芝繖さん雉子のなき聲　、
麓に入る美人に別て雉子の聲　嵐雪
柳かげふとそれの雉の夕暮　、
春かえる今宵よぬや雉子哉　希因
山の鳥や風より下をとり雉　来山
雉や取りもとれて中かへり　麦林

燕啼て夜蛇をうつ小家哉　蕪村

大津絵に糞落しゆく燕かな　、

大和路の宮もわら屋もつばめかな　、

つばくらや水田の風に吹れ皃　、

春雁

小田の水沢瀉も枯やしのゝ雁　其角

行雁

雁行て門田も遠くおもはるゝ　蕪村

明禮にあかしけり雁の声　嵐雪

帰雁　かへるかり

かへる雁関とひ誠に物かなり　、

帰る雁米洗ふも古々や都入　其角

雁啼てその夜味なや我の心　来山

きのふ去ぬけふいぬ雁のなき夜哉　蕪村

帰る雁田ごとの月の曇る夜に　、

雁立て驚破(ソヨヤ)田にしの戸を閉る　、

雲雀

原中や物にもつかず啼雲雀　芭蕉

雲雀より空にやすらふ峠哉　、

永き日を囀り足らぬ雲雀かな　、

菜摘の声々下に落る雲雀哉　言水

朝虹やおつる雲雀の地の眺　素堂

夕風に吹上られて雲雀哉　、

耕作の邪魔を去ゆかぬ夕雲雀　希因

雀子
親雀
蝶

帆柱のせみよりおるゝ雀かな　其角
草取て早苗かふるや夕雀　麦林
雀子やいつより傍の笹の影　其角
おふされてやさけても行も親雀　蕪村
起よ〳〵吾友にせんぬる小蝶　芭蕉
百とせもぬる菜の葉のうつゝかな　其角
舞むる蝶あるゝし行きとまるとそ　、
菜屑に花をみだして放蝶か　、
蝶ゝの中猿をとひ込京盗　、
てふ〳〵や杉の獣の見あまり也　、

蛙

夕日影町中に飛ぶこゝのつかな　、
酒くさき人にかゝはる蛙かな　嵐雪
是ハ蝶あまりて思ふに侍るかな　来山
うたゝねさ泥出まゝ行の蛙かな　蕪村
玉川や蛙なつくるの音　言水
菫池に生まれしものの蛙の声　、
飛蛙きぬにかへるもけうそれかな　素堂
夜かしこうちし川沼の思ひの数　其角
ちんまりと蝦よそふる洞の飛　、
よし野やさくての茶と中く蛙　嵐雪

鶺鴒の日を啼くらし蛙の聲 麦林
ひきうとらはむく飛ぶ蝶かれ 希因
ききられて田ふひろ中ぬ蛙かれ 来山
蛙とし出の声て光ん寺の経 、
行の後よ来て汲じみし蛙の飛 、
猫結び前まつは論のかきつくま 蕪村
月よ室蛙たち鳴る田面の聲し 、
日に日にられよ枕も夜明けよし啼蛙 、
閨よ居して其さき蛙のなく声哉 、
連ておきくそらる枕の蛙哉 、

蟇

池の蛙亀の浮みて浮なり 嵐雪
行春や卯の花なら蛙 其角
這出よかひやの下の蟇の声 芭蕉

猫

猫恋
猫の子
一

麦飯にやつるゝ恋か猫の妻 、
浮れ猫の狗の犬やゆく 言水
猫の子やいつく袋の手の綱 、

大井川こえて

猫の子もまたこそぬすみて人の花 沾徳

君が代に

飯くらふ夜のまつ行猫 其角
猫の子のくんづほぐれつ胡蝶哉 、
そこそこの面目なき猫の恋 、

足跡を追ふまゝ猫や雪の中　其角

猫の恋こや毛をもむ似さりけり　来山

川舟や猫の恋しき宿の窓

なき毛も恋猫に似あはでうかれけり　嵐雪

西方に聞こゆるなり猫のこひ　来山

京町の猫かよひけり揚屋町　其角

かるゝ人や業平の京の恋の宿　芭蕉

うかれ人や小野の妹もさそひ　其角

陽炎

長松もそ

しらぬ火に陽炎見ゆる夜明哉

陽炎にむすぼる(?)と猫の糸　来山

[illegible]

陽炎や名もしらぬ虫の白き飛　蕪村

田螺

かくれ行や筆にて出るをめ流る人　其角

宗祇より序目を見る田螺かな　来山

やもめなるある角ほ田螺かな

なつかしや浦の田や田螺ある人　蕪村

さびしさに京見る田螺かな　[illegible]

ところどころまてゐる田螺かな　希因

蜆

一升をかふる海より蜆かな　其角

石一つ清き流れもとどめけり

貝[illegible]

あさり貝むかしは汁におもひぬ

蛤うり　ふところやれ酒の蜃楼てとに　来山

馬刀　手業のある刀かさね羊の鞘　嵐雪

飯蛸　君臣有義　飯蛸のおの色見て汁肉餞　沾徳

飯蛸の色やなまて采るけ哉　来山

初桜

川舟に人を来けり初さくら　言水

人の手をかく家ありし初さくら　沾徳

業を喰ひ来むとひけ初桜　、

皆見て裳や踊るめくる初さくら　其角

山人をその間あし初桜　希因

元日を初東行る山や初さくら　、

懐に山すまをいらまて初さくら　麦林

旅人の鼻まだ寒し初桜　蕪村

身をひねる縁まうまり糸桜　其角

楸(ヒサキ)木よる長女(ヲサナ)伸しや糸さくら　嵐雪

椿

鶯の笠おとしたる椿哉　芭蕉

古川に蝋燭華と落る椿哉　素堂

大井川いさめて落る椿哉　、

落るより酔てゐて椿哉　希因

振のかしき国をしを咲けるよ　嵐雪

玉椿枝もろともなりかゝり　来山

古今園論集 跋

梅

汲溜て出し夢なり花ほとゝぎす　来山

ならさきのや梅咲うちむかふ宿　蕪村

餅搗人の座敷ありて梅のそれ　、

梅穂

見るとひ月の花にまさる梅樹の中　嵐雪

梅太

垣越にうちかゝる梅もとの　蕪村

焼野

志のゝめや小田のけぶり焼野哉　、

野とゝもに焼る地蔵のしきみ哉　、

もろこし

咲の日やしばらく待の麦のしく　、

畑打

畑うちのうえて見ゆる菜飯かな　嵐雪

畑うちや法三章の札のもと　蕪村

耕

畑うつやうごかぬ雲もなくなりぬ　、

畑打や木の間の寺の鐘供養　、

畑うつやこちの在所の鐘が鳴る　、

鳥うつ法やなるく啼ぬ山のあまり　、

耕すや五石の粟のあるじ顔　、

種下

種おろし俵に泥を小橋かな　其角

春寒や天気定めて種下し　、

古河の流れを引つ種おろし　蕪村

種俵

よのならひあるまさるや種俵　、

種かし

種ひたしやた引宮く一ほうさ　其角

苗代

苗代や座敷をはしる蛙ほと　其角

苗代り老のちからや尻たゝき　嵐雪

苗代に桑山またかれとまの暮　麦林

苗代の色紙に遊ふ蛙かな　蕪村

苗代や鶴子の揚ちかりけり　、

芹

淀艸にたゝしぬ芹川ちとりかな　言水

芹花

うきくひや径に咲る芹の花　其角

休ふ鷺芹振るゝあれの那　、

是切に径尽たり芹の中　蕪村

古寺やほうろく捨る芹の中　、

土筆

ちくしと摘やしはすはやつくし　其角

野嵐のふれをもふらんつくし　、

土筆たちきを侘しと見れ合ん　来山

菜の花

菜の花や淀も桂も忘れ水　言水

尼寺よ只菜の花の花盛り　、

菜畑に花見顔なる雀かな　芭蕉

かいやれる山吹ねとむ菜種かな　来山

晩の花や菜種の果を山の際　、

なの花や笋見ゆる小風呂敷　蕪村

菜の花や月は東に日は西に　、

烏賊

菜の花や鯨もよらず海暮ぬ　蕪村

夷ゑ又烏賊の墨までかすみけり　沾徳

独活

山寺の名をなつかしや作独活　其角

せうしなきさかり夜は作独活　嵐雪

芽独活

よそながら伏てこころに芽独活哉　来山

山葵

泥亀の膾やありくて土さびし　其角

枸杞

枸杞の垣よ色もふりたるひとつ家　嵐雪

蕨

一尺の蕨の茶や松のした[illegible]　沾徳

うらみ飯やいさ雨焚火拾つらし　蕪村

花ちりの蔓に拾へるとひとる　希因

几巾

几巾揚る子ハ見ぬ頭もがな　言水

さかしまに風呂しきもらし几巾　、

梅が香や笠をきて見る風巾　其角

かつしかや乞食をそしる凧　、

木の枝にしばしかかるや几巾　嵐雪

比叡山新緑唐もぬいてはなつ　、

糸はくる人と揚ふや風巾　、

紫藤をを引とめやいてはなつ　、

几巾きのふの空のありどころ　蕪村

やよ入のまいてるぬ几巾の糸　、

春雨

春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏り　芭蕉
はるたちはつかるまし日次の的　其角
春雨や新しきのまゝ枯はし、
細う流るゝ鳴の雨あがり、
隠士の茶の香も焚るや春の雨　希因
春雨や巨燵の外へ足を出し　来山
又しても人よりしきる春の雨、
春雨やそらしぬ家もらん捕、
はる雨や降とも見えし牛の目に、
茶をはじき蕗識るなる春のあめ　麦林

春雨のわしりのおくろの流れかな　蕪村
はるさめや綱が袂に小でうちん、
春雨や人住て煙壁を洩る、
物種の袋ぬらしつ春の雨、
春雨や小磯の小貝ぬるゝほど、
春雨や身にふる頭巾着たりけり、
滝口に燈を呼声や春の雨、
ぬなは生ふ池の水かさや春の雨、
春雨やものかたりゆく蓑と傘、
春さめや暮なんとしてけふも有、

春雨や身にふる頭巾着たりけり　蕪村
柴漬の沈みもやらで春の雨　〃
春雨やいさよふ月の海半　〃

三月

上巳

懐く雛を見せて小家の娘　嵐雪

桃節

埋もれてちりかゝりけし雛の桃　沾徳
隣やも小桃家の節のしるし　其角
桃の花さくよりあと残さるゝ　来山

雛　三月節 雪の外

三日月もおくれて待や桃の酒　麦林
家々やその佐野のわたり雪の袖　其角
すてのこや塗ぬ雛へ桃酒ゑ　〃
行春や雛の家や延春錢　〃
雛とりて絵ひなさうら雛の宿　〃
さかさりや雛に弟して小盞　〃
上座から雛のさゝの流れ哉　〃
芒ちる我涙ちかん妹が雛　〃
かはらゆの跡といつまで桜の雛　〃
隠居をもわくらふ花を雛の礼　希因

くらがりを雛も嫌め虎が母　其角
雛のさま宮様くまします、
服のひな清女が顔を一間かな、
折菓子や井筒がもとて雛のかげ、
残雛のさびしくさよなかりけり、
雛や、其の秦鏡なたてし中行けり、
よくこぬ琴なくて見ん雛つくえ　沾徳
う海を女の雛つくりかた衣なる　嵐雪
さくらちよの住まし作りや雛の巣　蕪村
古雛やむかしの人の袖几帳、

草餅

草を喰ふ出かはれ見んや雛二對、　麦林
此草もとらるよ作られて草喰ぬ　嵐雪
當の春て深作らん料の條　言水

闘雞

勝雞の世なきに花に抱きとめり
雞の指子にるるし逆毛こそ、　其角
別れをも作る夜もやとり合、
勝見をひとらん関の清さこ飛、
炭喰の夢さるまでもぬれにひ飛、

曲水

曲の水や翁もさうるるさきむきき　希因
曲水や出るよもも組みつりぐさ、

汐干

青柳の泥にしたるゝ汐干かな　芭蕉

帯程に川も流れて汐干かな　沾徳

汐干まで浪中にはしる車　言水

秋からむ比目を漁ん汐干かな　其角

汐干しる尋ねて魚も浮貝、

きのふの網釣はしてしほ干かな、

船よりきたる

一日を嶋の汐干や国の海　来山

去年ひられ鴨蟹の様引まさるかな　嵐雪

色鐘をきりしの浜坑や汐干浪　麦林

拾ふ者てかろき汐干かな、

貝拾

海士の子に町よりまじる汐干かな　来山

伊勢て貝拾てもろこし船の風　沾徳

貝ふくや白洲の末に流れ松　其角

子安貝二見の浦を産湯かな、

ますほうと花をとゝめる浅貝、

蜑浚や塩瀬によさる浅貝、

唐ごろもやかつぎ上げしさるの栗、

まつれ貝雪のふる淡としし人ら、

江の嶋や貝取誘ひて汐干貝、

青精飯

相撲民濃な菜飯人らかな　嵐雪

花鎮

鉢ゆりてちるや神の花鎮　言水

寒食

寒食や竈下に猫の目を痩しむ　其角

こゝ寒きころの寒食の黄昏、

御身拭

清かみ拭浄土や水の雛後布　言水

石竹の葉の流ひらるや桃の花　沾徳

桃　（又桃有歌）

桃のくさりて売児丸の桃の森、

おの〳〵の桃の聲や等持院　嵐雪

桃の日や解たる美人に笑ひろく、

恋をさえ待ちられてや是の桃　其角

ちゝに似る子も有し桃の実　希因

家ひとつ村に飾りて桃の花　麦林

桃咲や宿の机のぬきさしえ、

喰ふて寝て牛にならはや桃花　蕪村

家中病に待むる桃の花、

ほくゝより桃に老しき小家哉、

商人を吼る犬ありもゝの花、

海棠

海棠やいつまで剃子のみれた花　希因

海棠の雨にぬれてやとまりけり　沾徳

梨花

甲斐がねに雲こそかゝれ梨の花　蕪村

梨の花月に書よむ女あり、

花

桑の木にまくらひきよせ笑めくり　言水
桑の花うかれし尼の念佛まで
木のもとに紙子上座のぬさまての　芭蕉
伴しさよ木の下かげみなとまよふ
花を尋ねもしめ弥生共白浪と
木の山紫宸殿さやかれ坊主達
一僕をつれしふせし木の下かげ
まや木の女まで酔ふ人後　堂
木の下の菊も霜しあらし竈　言水
見えこ木揚屋の豊主生念佛

鉢の床嵐の花やしぼみたる
佐野の梅乗り移し人せきれたるり
下戸は木にかゝ枝を切りし芳野鐵
わりしものを備へさうりて木の陰
花の中より見合す人笛流し
日つきたのしさ木にも嫁ぎ丁稚　治徳
おりし枝を花に乱ぬく山猿の手
鷲の尾りし待つ状をなし花見衣
おりつなる山や花見の足だまり
流れこみて森まての隠や木の陰

ゆれ親もなつかし花の達磨堂　沾徳

追付てぬけるや振出茶屋　、

折ふしも花のあはれをわかれけり　其角

茶を煎をのゝしる床をあかりけり　、

彫笛縫襄茶の嗜せん浮世哉　、

女なるふみや酒皮を取よろしの心　、

茶ふけて中りまうかりう寺参り　、

まれなるもふ侍らぬしきりん頼かな　、

名さあり中傾城五十年茶さしめ　、

もれきこりふく今清らる人もあ　、

茶わけて人の孫よりほらうらん　、

まみるよ鐘きこのきはん暄嘩買　、

大佛据るはむらんまるの由紀　、

茶ふきまいせて似合ん人は往　、

花ひらり鐘よ往気のまへし都　、

出しと春の名のある中節扇　、

縁つゝきてよすこおの花の庭　、

比颯中茶のおのまを打きつり　、

極木屋の亭を湯まて茶の宿　、

殊よ此きれを拝たさ出て茶会　、

其角

花によりてかへるくまの妹あり、
花見より都き幕の花なり、
亀まうて表書流て花月代、
座頭は花見ぬ女中花ざかり、
月花や湯殿の寺社花なく、
花の道歌をよまん勅なるを、
白雲や花にまきり新左衛門、
世の中も花にしみつ昼の外女と花、
人を人を慰の実や花による、
その花にかゝれるこゝろや小豆、

始めて万人を悦ばして

寸馬豆人

花をのん俳者の表月花、
花見に海僧も僧人塩肴、
花近き花のこゑされが銭包、
陰利狂人ぬすびと花見まてを、
花見もの花ころ俳銭花は浅茅主、
花城や花のこゝろまて花のれう、
此国り花見ぬ人や家の主、
出俳銭人の延さるまるえこの花、
偶像の鼓らつなる夏花、
かんさしやちりり花のありしも、

沢き妻妻戯妾の宿見えつれ　　其角
車まて宿んと見えてや東山　、
きうり徒士足早き比の出見や　、
大井川船ゆるゆかしきなの旅
きゝ雪と仇名ありけり宿さかり　、　嵐雪
月宿のきひとらしや火吹鉢　、
山雀の酒綾咲かんまなの中届　、
富士をえぬ去人もゆかん雲の山　、
年暮の節を車宿や宿の昨　、
秋霧みろ宿打ゆりや山　嵐　、

宿ま風ゝの絹くさゝふけ濡の泡　、
宿序く難しゆるる古の女ん　、
女中あ尼出るさきのさん者ろ　、
萬好の遊をりあり宿情くり　、
逢坂き関の詠ありさきのそう　、
宿の萬此身を留まん事多花　、
舞ちりて雲銭安し賤はし　　来山
初をひ桑を中にふの出つ紀幕る　、
花ときらてちりてふそつ跡の山　、
宿の宮もるうゝちて追ゝの暮　、

古寺や誰かうへ捨し花一木　芭蕉
むく起の鐘のこゑのまほひかる　、
山里は人をいうきの花ヶ盛り　其角
花の風天女層まし花が行り　、
沙を呑花に入桐花の新　、
花生て見へん丸腰や刀鍛冶　来山
蛍喰て見ても見ひり窓の外　、
小庭石や花見ぬ中でもよしの山　、
ちる花や雪のちるとて馬の上　、
銀夢の花に志しるも都かれ　、

女人形記

もも嶋ゆ淺き花うつとらく　、
蝶花に宿て見て蝶のうきれ哉　、
蝶るままをよんれたまく蝶の夢　、
花ちりて木の間ちかひ一ッ寺　、
我も見る桜の花やあさほう　、
花の名は胴を刻れいつまでを　、
日傍花さつきうち花も人　、
其のさまし嶋やもるの中あ　蕪村
花よまて花にいねむるつくゑかな　、
黄の花や嵯峨のとりし大清寺　、

蕪村

ねぶたさの春は御室の花よりぞ

花の御能過て夜を泣く浪花人

花に暮て我家遠き野道かな

花に遠く桜に近しよしの川

花の幕兼好を覗く女あり

嵯峨へ帰る人はいづこの花に宿

猿や燈や鞍馬にまうづる花詣なり

花ちるや重たき笈のうしろより

小冠者出て花見る人を咎めけり

居風呂に後夜きく花のもどり哉

桜

花を踏し草履も見えて朝寝哉

花に舞はで帰るさにくし白拍子

玉川に高野の花や流れ去

なら道や当帰ばたけの花一木

高野を下る日

かくれ住て花に真田が謡かな

花ちりて木間の寺となりにけり

傾城は後の世かけて花見かな

さくてなくもし渡りけり小舟花の茶

素堂

うんそうてのゝ宗祇よけり

蕉の見る日の雨しばし山ぶらり

芭蕉

さま〳〵のことおもひ出すさくらかな　芭蕉
木のもとに汁も膾もさくらかな　、
似合しや豆の粉飯にさくらかり　、
ならなゝへ七堂伽藍八重ざくら　、
人しくにおもはしきやうすし山桜　言水
色きくして蝶のなびくし山桜　、
入あひのかねを深ぬをこゝろえる　、
鶏杖に何咲きたまる桜かな　、
おもはくらしに何やひとり深山の雲　、
美人搗毛人にくらて桜かな　結徳

作者不知

花ちらし鳥に鳥鐵や平野川　、
世の中をされ画さらしの桜かな　、
木のもりし都にあらしさらしかな　素堂
さまきのえんさらしの花の都人参　、
唇を包りて漆桜かの都　其角
筆深に鋼線さらしらうことにん　、
いなつまの中より木なりし桜かな　、
山桜みを流らさの桜子この都　、
隣家の雉折さむしや夜桜　、
出先の東に流れ出はなかな　、

猿のよる海棠とみえて桜つれ　其角
山さくら隠くるしき僧あらん、
茶のけふりに法眼隠を山さくら、
山さくら猿を放して猿の飛、
明ぼのや桜さくらぬ山のはら、
桜しむる孫も自ら言葉ほし、
深山木桜にはかぬ母さくら、
玄孫まその二月や山さくら、
饅頭て人を引よやぬさの宮、
小坊主や松にかゝりて山さくら、

八ツ目の山は桜しや一流さ、
いはさくら小町が姉の花ざかり、
二筋の雲さ角見ゆ山さくら、
花咲を斗に笑む夜桜、
さくら狩人を国恩の言葉よ、
深山や雷後たえたり桜寺、
又さそふ後に桜さし出使の飛、
隠しけてある藤のさくらかゝるよ、
花見る人しらず花も桜の飛、
京中へ地主のさくらや花の縁、

釣ゝ手の気をかしませて桜かな　希因
下部らし浅黄ざしよ袷さくら　其角
座まで持参る銭うる桜茶屋　嵐雪
花なくとも毛虫にまぶし山桜　、
筆とるを硯やかし花見けつ　、
手入るゝ人の脊戸しやみさくら　希因
よいほどの銭かくし出しけり山桜　麦林
織姫の袖を染けや糸さくら　、
嵯峨の春は寺まで花や山桜　、
塵をわけて塩にあかりて桜かな　、

うちなかて僕は忘るゝさくらかな　来山
えぞうえまでちらし日高の山桜　、
人の目にあまるものなし山さくら　、
本来ひとつにしてさらに咲にけり　、
世のことをいふ耳なしの山さくら　、
九重もゐなかに見せて桜咲　、
見まつりの見るとかさしの桜哉　蕪村
浪漂ひと日閑院様の行くらし　、
花ちんとしてはなを出し日の山桜　、
ゆきまつてゆみける宮や花桜　、

みよし野ちかくの女すみし山桜　蕪村
手肩の松を吹来て山はのゝ　、
またさくも散しも夕暮れ山桜　、
海手より日は照つけて山ざくら　、
剃刀を待てらるゝ女山さくら　、
窓に入るやもの間の山桜　、

梅人
衣桃林を出て晩霞のかゝ人　、

帋衣
武士の紙裏やかりしの衣ころも　、

落花
衣猿の衣さらしひさてまたくろも　其角
むかしやろや汲も嫁をとて落る花　沾徳

阿蘭陀
桜鯛
青ざし
和布
傀儡師
青麦

辻の奴花むしり野辺をうしかり　其角
阿古久曽のさしぬきふるふ落花哉　蕪村
阿蘭陀も花に来にけり馬に鞍　芭蕉
津国の何五両せんさくらたい　其角
青ざしや草餅の穂に出つらん　芭蕉
祢宜の和布にこぼすや貝杓子　沾徳
ろくまうを扇ぐ門や傀儡師　其角
傀儡師のの伎の唄紙小袖　、
さなへ麦の穂俵しひろふし　沾徳
青麦のたくりまわる鶏の声　、

躑躅

王子曲りの道にて

なつかしき木屋一見のつゝじ哉　其角
旦夕のうらしむるつゝじ哉　、
手香をと鳥帽子はれきせん岩つゝじ　、
ゐるかきつゝ新つゝんさふ岩つゝじ　、
小うた居てきけるの外うつゝじ山　、
つゝじゆゝしゆかりの角櫓　嵐雪
つゝじ咲て片山里の飯白し　蕪村
道をさへ出てうれ野のつゝじかな　、
つゝじ咲て石移したる嬉しさよ　、
岩ね嫁ぶ影見のつゝじかな　、

つゝじ野やかはらぬ河ゝ麦畠　、

山吹

山吹も柴垣も家もうらさき　其角
月雲も山吹の晝顔しし　、
山吹折して流れ瀬の上　言水
山吹や此鵜ゐ流るなりし　希因
山吹のちりて流れてゆくの䢗　麦林

藤

藤咲て鉛くもの目をうらへなり　其角
手絡やもつるゝ藤の棚　、
ふ藤を砲えて垣にかゝる哉　、
よ藤はえぬ石の又続や藤は哉　、

藤咲て鶚(ミサゴ)をゆくりゆくと浪　嵐雪

小町か古跡をとひて
小町寺よそに見ゆけりかゝる松に藤　、

いつまでも雨の降るやまあ人の藤　来山

中々にうれしき人の行り藤の花　希因

うたゝねの夢にまつりかけて藤の茶　蕪村

よそにして宇治の茶摘か売し藤のしれ　、

薹

背は人に立つし薹たつ菜の花　、

唐までへ出る姿見上りてゆく　、

土橋から鮮菜を喰ふ萌る草哉　希因

菜苗

菜なきを淀まきり捨し蜀の苗　沾徳

茶摘

茶の木に里で茶摘の歌かぶり　其角

遅日

遅き日や雉子の下りゐる橋の上　蕪村

山鳥の尾をふむ春の入日哉　、

遅き日のつもりて遠きむかし哉　、

炉塞

炉塞て南阮の風呂に入身哉　、

炉ふさぎや床は維摩に掛替る　、

呼子鳥

松風に盲の歩行呼子鳥　言水

俤にふりぬめなかへし呼子鳥　其角

柳鮠

春の江の秋の木の葉を柳鮠　嵐雪

小鮎

鮎小あゆ出ぬるやの京気色哉　素堂

蚕　孫どもの蚕やしまふ日のうるさ　其角

ところ　出ることはひろひ銭なり人を踏る　来山

別霜　くる世の庭つき花蝶や別れ霜　沾徳

行春　行春を近江の人とおしみける　芭蕉

行春や猿に銭投る鵜の声貝　其角

ゆく春や横河へのぼるいもの神　蕪村

洗足の盥も漏りてゆく春や　、

行春や白き花見ゆ垣のひま　、

行春や撰者をうらむ歌の主　、

ゆく春やむらさきさむる筑羽山　、

春の暮　行春や京へ八のとき出かなし　布因

行春や網にかゝらぬさくら川　、

待人の足音遠き枕そも暮る　蕪村

小伊ひかる夜をたのむ春の暮　、

三井寺へ鐘をとりにてまだ暮ぬ　布因

暮春　或人より句を乞れて　返歌なき青女房よくれの春　蕪村

春限り　まさしくふる日は春の限りかな　、

春惜　手編して座ふむ人や春惜む　、

春をしむ座主の聯句に召されけり　、

春をしむおかみやしらぬ里の大雉　、

春残遂　鶯に暮て春を送られ白髪や　其角

晩春　春もやゝ山いゝ白く首若し　素堂

春盡　春ゝのゝの暮残なるひて仁和寺　蕪村

俳諧十家類題集春之部終